

モンゴル国紀行

Ⅱ. かの国の草原と星とゲルの記

江戸ソバリエ協会 理事長
ほしひかる

私たち一行は貸切バスで、バヤン・アグト郡(ボルガン県)のハギーンヌールという所へ向かっています。

前後左右、ほとんど草原です。よく砂漠に立てばどちらに行ってもいいかわからず、精神がおかしくなるという話を聞いたことがあります。草原も同じだろうと思いました。バヤン・アグト出身の運転手さんだから方向が分かるのだそうです。それに草原という気持ちよさそうですが、とんでもありません。車道は都市しかなく、草原はほとんどが土のガタガタ道です。時々バスの車体の腹がガシッ・ガシッとつかえています。車が通ったところが道になっていますから、「けもの道」ならぬ「くるま道」です。

でも、考えさせられました。本来、道は人が歩くための道であり、車の道ではなかったはず。現代の都会が道という道を「車道」にしてしまっていて、いま走っている泥の道が本来の道ではないだろうか、と。とくに日本の道路は、歩道は狭く隅に追いやられ、人間より車道優先になってしまったといわれています。どこかで人間の道と科学技術の道を踏み外してしまったのではないかと思ったりしました。

とにかく揺れに揺られて7時間、バヤン・アグト郡の一隅にある水辺のキャンプ場に着きました。言っておきますが、草原というのは平原ではありません。小さい丘、大きい丘が延々と連なっています。その窪地に雨水が溜まると、池やちょっとした湖ができます。そこに山羊、羊、牛、馬、場所によっては駱駝たちが水を飲みに来ます。かれらを「五穀」ならぬ「五畜」と呼ぶのだそうです。ただ豚と鶏は放牧に合いませんから、対象外です。

モンゴル国の人口は約350万人、対して五畜は約7,100万頭(2019年)だといわれています。そのうち羊、山羊がほとんどです。モンゴル国のカシミヤが評判になったこともその一因でしょう。キャラバンの時代には駱駝が、戦いの時代には騎馬用の馬が人間の友となり、そして現代は山羊、羊の時代なのでしょう。

私たちの祖先は、1万年以上前に植物を栽培し、動物を飼育するようになりました。始まりは偶然からでしょう。たまたま野生の麦の種から芽が出ているのを見つけて自分の意思で育ててみようと思った者がいたのでしょう。たまたま野生の子山羊が懐いてきて自分で育ててみようと思った者がいたのでしょう。このときが農業と牧畜の始まりです。

牧畜には、乳の出る動物が選ばれ、人間が御しやすい群れる動物から飼育を始めました。すなわち、山羊、羊、牛の順に、そして最後に御しにくい馬の飼育を始めました。そうしてみますと、放牧に不向きな豚や鶏の飼育は農耕民族が

飼育を始めたのかもしれませんが。やがて、哺乳動物を飼育する者たちは田畑を耕す者たちのもとから離れていきました。去って行った者たちは遊牧の民となり、残った者は農耕の民となりました。そして、何千年か経って、遊牧民族のなかから馬を飼育する者が出てきました。やがては馬に騎乗するようになり、騎馬民族が出現しました。

馬の飼育、騎馬の始まりについては諸説ありますが、黒海北岸のスキタイ、モンゴル高原の匈奴が騎馬民族の雄であったことだけは史実から明らかです。

この大草原やあの山々の遥か向こうは古の騎馬隊が疾駆していたのでしょう。

通訳さんの話によりますと、「一帯は先祖代々わが家族の放牧の地だ」と言えばそれで話はついていいたけれど、現代では書類で示さないとなくなかった」と言います。現代のビジネスと昔からの慣習との、あるいは都会と草原との、あるいは農業の心と遊牧の心との、あるいは科学と人間との、摩擦が起きようとしているようです。でも、このような大草原にいと、どちらが正しいのか分からなくなります。

私たちは、五畜の群れに見とれました。丘の向こうから何千頭もの羊や山羊が下りてきます。ゆっくりと水辺に向かいます。先頭が止まると群れの動きが止まります。先頭が動くとまた群れは進みます。時間は無限にあるかのようにゆっくり、ゆっくりと。日本では生産者さんに飼育の話をうかがうと、「ストレス」をかけないようにと、よくおっしゃいます。しかしこの天地に住むかれら五畜にはストレスなんかまったくないだろうなと思いました。

私たちもまた飽きもせず、『命と水』の現場を目撃していました。





《水辺と丘に山羊や羊の群れ》



《日没 21 時ちかく》

夜は、ゲル風テントに寝ました。私たちのテントはSさんとHさんの3人組でした。

夜、シャワーを浴びました。寒くて、ガタガタと震えがとまりません。「これは、マズイ！」慌てて持って来ていたズボン下とスポンを穿いて、冬用のダウンを着てベッドに潜り込みました。しばらく眠っていたようですが、目が覚めました。震えはとまっていました。私はゲルの外に出てみました。野犬が出る

かもしれないので遠くへ行っていけないと言われていました。昼間の五畜たちは^{ねぐら} 罎に戻っているのでしょう。



《ゲル》



《ベッド》

私は夜空を見上げました。草原も広大ですが、宙も広大です。大きな月と星が近くに見えます。ここに来るまでは、てっきり満天の星かと思っていましたが、ちがいました。数は少ないのですが、星が大きく手に届くようでした。ここが天に近いからでしょうか。当地辺りの標高は 1400 kmはあるそうです。

私は、ゲルに戻って、またベッドに入りました。

こうした草原の実感で、モンゴル国に来てみてよかったと思いました。

以 上

[参考]

ほしひかる『新・みんなの蕎麦文化入門』（アグネ承風社）